

東京大学

理学部広報

第3巻 第10号 昭和46年12月5日

10月理学部会合日誌

- 11日(月) 14:00~17:00 理学系研究科委員会
13日(13) 13:00~15:00 主任会議
13:00~15:00 教務委員会
15:00~17:00 人事委員会
20日(水) 13:00~16:30 教授会
27日(水) 16:00~17:00 主任会議
29日(金) 国立大学理学部長会議

11月理学部会合日誌

- 2日(火) 15:00~17:00 教務委員会
8日(月) 14:00~16:30 理学系研究科委員会
10日(水) 15:00~17:00 主任会議
15日(月) 12:30~14:00 理職との会見
17日(水) 14:00~16:30 教授会

教授会メモ

11月17日(水) 定例教授会 於4号館物理会議室

1. 前回議事承認
2. 人事異動等報告 外国人研究員報告
3. 研究生の期間延長について
4. 旧学部長よりの報告

久保前学部長から建築委員会の長期計画特別委員会(7月頃から作業開始)における理学部関係建物に関係したマスタープランに関する報告があり、質疑応答があった。また、生物化学教室の経過と現状についての報告があった。

5. 理学系への代表委員選出
小平学部長が選出された。
6. 学内状況等報告
○教養学部のスライキ
○農学部キャンパスの状況
7. 教務委員会報告
飯田委員長から“東京大学理学部規則の特例措置”および“理学部学士入学および転学部転学科に関する内規”のそれぞれの案についての報告があった。
また、理学部便覧の訂正についての意見が述べられた。
8. 会計委員会報告
下郡山委員から10月28日の会計委員会について報告があり、一般研究Aの審議の結果が述べられた。(別項参照)。
9. 人事委員会報告(今井委員長)
10. 次回教授会開催日 12月22日(水)
11. その他

幹事会

大木, 木下, 寺山, 佐々木(亘), 黒田(晴), 藤田教授
学生委員
宮沢弘教授, 露木, 藤井(隆), 永田助教授

小平先生の横顔

小平邦彦先生は、昭和13年3月東大の理学部数学科を卒業され、引続き物理学科に学士入学されました。これは当時 Hermann Weyl が物理学と数学を見事に統

合してみせたのに感銘をうけてのことと伺っており。物理学を卒業された後、同教室講師、東京文理大助教授を経て、昭和19年東大助教授になられ、五年後渡米されるまで物理学教室に所属しておられました。この間、先生は既に二つの重要は御研究をされています。(以下数学の用語を多小使わざるを得ませんが、数学以外の方には多分読みづらく、また学者からは表現が不正確だとお叱りをうけそうですが、その点御寛容をお願いします。) まず一つは、調和積分論といわれるもので、副題(一般化されたポテンシャル論)の示すごとく、H. Weylの有名な著書「リーマン面の理念」で扱われたリーマン面上のポテンシャル論を、高次元のリーマン多様体に拡張したものであります。他は、二階常微分作用素の固有値問題に関するWeyl-Stoneの展開定理で残されていた基本的問題を解決されたもので、Titchmarsh-小平の定理とよばれています。この時期は丁度戦時中から戦後にかけて、欧米との文化的交流がとどえていた時ですが、欧米においても前者は、G. de Rham, W. Hodge, A. Weil等一流の数学者によって独立に研究されており、後者もE. C. Titchmarshにより独立に扱われていたのです。これはまた、小平先生の研究の重要性を裏書きするものといえましょう。

さて戦後小平先生の良き理解者となられたH. Weyl教授の招きで、昭和24年アメリカのPrinceton高等研究所に行かれました。以後今日に至るまでの先生の御研究は、一口にいえば、「超越的方法による代数多様体および複素解析的多様体の研究」であり、とくに渡米後4, 5年間の主テーマは「調和積分論とその代数幾何学への応用」でしたが、それを実に精力的に推し進められました。まず初めに先に述べた調和積分論を応用して、高次元代数多様体上のRiemann-Rochの定理の研究に先鞭をつけられました。次に、当時H. Cartan等によって展開された層とコホモロジーの理論をとり入れて調和積分論と融合させ、特に「小平の消滅定理」とよばれる応用上極めて重要な定理を証明されました。つづいて、射影空間にうめこめる代数多様体を(ある種のKähler metricの存在によって)特徴づけることに成功されました。これらの業績により、1954年(昭和29年)Amsterdamで開かれた国際数学会議において「Fields賞」を授与されました。これは数学のNobel賞ともいわれ、4年に一度開催される国際数学会議で、若い傑出した数学者二人(最近は四人)におくられるものです。授与式でH. Weylは小平先生(ともう一人の受賞者J. P. Serre)の業績を説明した後、結びの一節で「あなたの仕事は、私が若い時試みたことと少なからぬ関連

がありますが、あなたは私の夢想もしなかった高みに到達されました」と賞讃の言葉を贈っています。

これより後の先生のお仕事も沢山あって一々挙げることはできませんが、特に有名なものは、「複素解析構造の変形の理論」および「コンパクト複素解析曲面の理論」の二つです。前者はD. C. Spencer(現在Princeton大教授)との協同研究になるもので、高次元の複素多様体の変形に関する最初の一般的、系統的な理論です。後者は、Castelnuovo, Enriques等イタリア学派による代数曲面論——それは今世紀の代数幾何学の発展を促した大きな原動力でしたが——を吸収し完成させた重要にして美しい理論です。

さて、先生は上記のような独自の研究をされるかたわら、Princeton高等研究所をはじめとして、Princeton, Harvard, Johns Hopkins, Stanford諸大学で教鞭をとられました。私(「横顔」の筆者)も昭和39年からJohns Hopkins大学に留学して、先生の講義を親しく職講する機会を得ました。「曲面論」の講義で、週二回ずつ一年間にわたるものでしたが、実に明晰で面白く、こういう講義もあるのかと大変感銘をうけました。しかし初め十数名いた職講者が年度末には僅か4人になってしまったのにはとても残念でこれが東大なら教室一杯の学生がいるだろうにと思ったりしたものです。所がその2, 3年後に日本の数学界の強い要望にこたえて帰国され東大で教えられることになりました。先生の在米中、その下で学位(Ph. D)を得た人は4, 5人で比較的少数ですが、直接間接に教えを受けた人は非常に多く、その中には広中, Baily, Hirzebruch, Atiyah, Mumford Griffiths等現在第一線で活躍している人の名を挙げることができます。先生が帰国された際には、日米数学界の双方から、記念と感謝の意をこめて、論文集「Global Analysis」(東大-Princeton大出版会)が捧げられましたが、上記の人の他、多くの数学者が寄稿しています。ついでながら、先生のこうした在米中の御努力は、日本人数学者に力強い目標を与え、その国際的地位を著しく向上させました。私も留学期間中、先生をはじめとする諸先輩によって切り開かれた道を歩む恩恵をしばしば感じさせられました。

さて先生は昭和年に永い滞米生活を終えて帰国され、再び東大に戻られました。その後も、一般型の代数曲面や、K曲面に関するものなど幾つかの深い御研究がありますが、既に耳慣れない言葉の連続で読者の注意をかなり疲れさせたことと思いますから、詳しいことは省かせて頂きます。教育者としての先生は、学部、大学院で講義やセミナーを担当され、接する学生達から敬愛されて

います。更に学生、研究者達の参加する「解析多様体セミナー」を主宰されていますが、ここからは既に多くの若い優秀な数学者が輩出しています。その他、学内では大学院の数学課程主任や大学院協議会委員等を務められ、また学外では、日本学士院会員、日本数学会理事等をされています。話が前後しますが、Fields 賞受賞以後、わが国においても、昭和 32 年 5 月に日本学士院賞を、同年 11 月には文化勲章を受賞され同時に文化功労者となりました。更に昭和 40 年、日本学士院会員に選出されたのですが、現在でも最年少会員だそうです。

最後に、先生のお人柄と御家庭に簡単にふれて、この稿を終えたいと思います。先生の落ち着いた暖いお人柄は、接する者にいつも尊敬の念と同時に親しみをよびおこします。先生は、数学の他、物理、天文、生物等にも深い関心をもっておられ、よく最近の学説や新発見について話題にされます。それから音楽にも御造詣が深く、時々ピアノを楽しまれます。御家族は、奥様とお嬢様で、とても暖い雰囲気を持った御家庭です。特に 18 年におよぶ滞米生活を通じて先生の研究活動を支えてこられたセイ夫人は、更に良き協力者として、新学部長小平先生を助けて下さることでしょう。(塩田徹治)

昭和47年度科学研究費一般研究 A 調査一覧表

審査希望部門	研究題目	教室	研究担当者
物理系	核磁性と光による遷移金属化合物の電子構造の研究	物理	飯田修一
"	安定領域から遠く離れた原子核の γ 線分光学	"	中井浩二
"	極高エネルギー μ 中間子束の研究	"	小柴昌俊
生物系	パルス核磁気共鳴法による生体高分子の動的構造の研究	"	和田昭允
"	細菌べん毛の遺伝学的研究	植物	飯野徹雄
化学系	微量活性吸着種の動的研究による固体触媒作用の機構の解明	化学	田丸謙二
"	メスバウアー分光法による無機化学的研究	"	斎藤信房
"	生物光化学反応系の構造化学	生物化学	宮沢辰雄
"	蛋白質の高次構造に関する研究	"	野田春彦

教官人事移動 (除退・休職)

氏名	所属	発令事項	発令年月日
正田篤五郎	鉱物	教授に昇任	46.10.16
高倉達雄	天文	教授: 天文台より理学部に配置換	46.10.16
野崎昭弘	情報研	助教授: 教養より理学部に配置換	46.11.1
井森正敏	物理	助手に採用	46.11.16
岩崎泰穎	地質	助手: 資料館より理学部に配置換	46.12.2
天埜堯義	物理	助手: 九大より理学部に配置換	47.4.1

学部長 (代理) と理職代表との 会見について

上記の定例会見が、11月 15 日 12 時 30 分より理学部会議室において開かれ時半頃終了した。理職側の出席者は金子委員長、福谷副委員長、浅見書記長を含め約 20 名であり、発言は三役、各問題担当者のほか出席者が随時行なった。一方、理学部当局側の出席者は 5 名であったが、学部長の代理として出席した大木教授が主として発言し、時に応じ吉野事務長がこれを補足した。

冒頭、大木教授から当会見に関しては学部長に委任されて代理をするものであるとの説明があり、代理の意味などについての質疑がなされて後、議事に入った。

金子委員長から提出された主要な議題は、定員削減に関する件、宿・日直に関する件、生化人事に関する件、保育所に関する件の件である。

1 定員削減

第 2 次定員削減に関し、理職側は、イ) 進行状況を質し、ロ) 削減を防ぐ意味で空定員を早急にうめよ、またその際、臨時職員からの採用、古い臨時職員の優先を原則とせよと主張した。さらに、ハ) 今回の削減に対する理学部としての対応策を尋ね、学部長あるいは学部教授会としての反対の意志表示について要望を行なった。

これに対し、学部当局側は、イ) 東大には割当が来ているが学部には未だ来ていない、ロ) 今まで空定員はうめるように努力をしている。理学部はもともと臨時職員の定員化の努力をしているが、公務員試験の合格者を採用することが建前であるから、臨時職員の中で公務員試験に合格したものは優先して採用することにしたいと述べた。さらに、ハ) 削減に対する反対を学部としに、総

長を通ずる線以外に実効をもって行なうことは機構上困難であるとする。しかし、削減は理学部としても極めて苦痛であることは事実である。また、当面の切抜け策として、大学院事務や大型装置に対する定員要求などの定員増を概算要求の形で特に強力に行なっていると述べた。

上記の理学部当局側の回答に対し、理職側は原則に照らし、また、第次定員削減に際しての他省の切抜け方などを引合いに出して、反対に向けての一層の努力を要求した。

II 宿・日直問題

理職側は、イ) 年末・年始の宿・日直は実状から考えてやらなくてよいのではないか、ロ) 宿・日直手当が安すぎるのは困る、ハ) 宿直の際の“弁当代”に関し前理学部長から支給できないとの回答があったが、他学部の事例に照らし、検討経過を明らかにして欲しい旨の主張があった。

これに対し理学部当局側は、イ) 現在年末年始の宿・日直をやっているのは1号館だけであるが、研究者の協

力があれば、これを止めることも充分考えられる。1号館運営委員長を含めた関係方面と相談して結論を出したいと述べ、ロ) に対しては事情を説明し、ハ) に対しては後日連絡することを約した。なお、宿・日直に関し、理職側から、報酬の不满などから廃止を希望するのが大勢であるものの、例外的な場合もあり、やめてしまうというだけでは困るとの意見が出された。また、宿・日直の任務・責任を明らかにして欲しいとの要望も出された

III 生化人事の件

理職側から現状についての質問および早期解決の要望が出され、応えて理学部当局側の説明がなされた。

IV 保育所の問題

現状についての説明および、関連して理職員の利益が害なわれないよう配慮して欲しいとの要望が理職側からなされた。

V 理職側は次回以降の会見に学部長が出席することを要求した。当局側は学部長に要望を伝えることを約した。(藤田宏記)

外国人客員研究員報告

教室(所属)	国籍	氏名	現職	研究期間
情報科学研究施設	アメリカ合衆国	ジョーゼフ ヤングブロード	Research Ass't, Archives of Folk + Primitive Music, Indiana University.	昭・46.11.1~ 47. 5.31

理学博士学位授与者

学位授与年月日	専門課程	氏名	論文題目
46. 9.13 (修了)	数 学	森 本 浩 子	周期的に動く境界を持つ領域におけるナビエ・ストークス方程式の周期的弱解の存在について
46. 9.13 (修了)	化 学	菊 池 祥 之	アゾ化合物の反応
46.10.11 (修了)	生 物 化 学	東 中 川 徹	ネズミ肝核小体のリボソーム前駆体粒子
46.10.11	学位規則第3条2項該当者	杉 田 恒	蒸着多結晶磁性薄膜の Rotatable Anisotropy
46.10.11	同	奥 村 彰 二	陽子線型加速器の位相運動に対する空間電荷効果
46.10.11	同	小 谷 野 喬	ハロゲン化第二銅によるオレフィンのハロゲン化

理学部ところどころ

古い文書から No. 6

今回は明治時代の職員表やら議事録などをさがし出し

てみた。大学の名称がそのときによりまちまちなのは、明治 10 年に東京大学、明治 19 年に帝国大学、明治 30 年には東京帝国大学と改称されたためである。また昭和 22 年には 70 年ぶりで往年の東京大学に戻って現在に至っている。

東京大学理学部職員表

明治 14 年 12 月現在

職名	人員
部長	兼 1
教授	6
助教授	12
准助教授	1
講師	1
准講師	1
教員	1
教場助手	3
植物取調方	1
画工	6
合計	33

小石川植物園物品表

自明治 13. 9 至明治 14. 8

品目	在来数	増数	減数	現在数
草木種子	2,866種	613種	19種	3,460種
腊葉	380種	57種		437種
有用木材見本	3,373種	345種		3,718種
草木写生図	110種	15種		125種
	145種	52種		197種

帝国大学理科大学一覽 (明治 19 年 10 月)

職員

長	教授 菊池大麓
教頭	“ 矢田部良吉
教授および教師	
化学	エドワルド・ダイバルス
植物学	矢田部良吉
数学	菊池大麓
物理学	山川健次郎
化学	桜井錠二
動物学	箕作佳吉
物理学	カルギール・ジー・ノット
星学	寺尾寿
地質学	小藤文次郎
鉱物学	和田稚四郎
古生物学	原田豊吉
地震学	関谷清景
助教	
数学	三輪桓一郎
物理学	田中館愛橘

化学	吉田彦六郎
地質学	菊池安
植物学	大久保三郎
化学	堺和為昌
助手	
植物学	松村任三
動物学	石川千代松
講師	
物理学	村岡範為馳
化学	久原躬弦
生物学	松原新之助

学科

第一	数学科
第二	星学科
第三	物理学科
第四	化学科
第五	動物学科
第六	植物学科
第七	地質学科

管理に属する実験所

第一	天象台
第二	地震学実験所
第三	植物園
第四	臨海実験所

学生生徒

数学科	3名
星学科	3
物理学科	2
化学科	2
植物学科	1
動物、植物学科	7
地質学科	5
選科	7
計	30名

上記のうち特待生

(物理)	長岡半太郎
(化学)	池田菊苗
(動植)	三好学
(地質)	神保小虎

明治 45 年 4 月 19 日東京帝国大学理科大学

教授会議事録 (抄) (原文はかたかな)

出席教授

桜井, 横山, 寺尾, 松村, 長岡, 池田, 藤沢, 五島, 坪井, 吉江, 坂井, 高木, 中村, 山崎, 田丸, 村井,

三好, 大森, 神保, 埴和, 平山, 渡瀬, 田中館, 飯島
松原

1. 桂田桂太氏理科大学助教授に任用せられし旨学長より報告。
1. 山崎直方氏は東京高等師範学校かが本官のところ、本学を本官とすることに関し協議ありて可決す。
1. 日光植物園新分園は狭小にして不便なるが故に旧分園を売却せし代金の一部を以て別に4,000坪地面を購入せし旨学長より報告あり。
1. 物理学教室一部移転場所購入代金として東京市より金20,000円を受け、本学前森川町を電車通行のことに決定せし旨学長より報告あり。
1. 大学院理科学学生池田晏平より水産講習所の囑託を受け大学院に於て魚油を研究したき旨出願の件可決。
1. 45年度予算の件に関し学長より報告あり、又庁費3,000円の用途に関し種々評議ありし後該金を各教室の経費予算額により按分比例を以て分配することに決す。
(吉野誠治)

お 知 ら せ

○昭和 47 年度イスラエル政府奨学金略学生の募集

専攻分野: 人文科学・社会科学・自然科学(芸術の実技を除く)

応募資格: 大学卒業業者・明年3月卒業見込者者年齢36未満の者

締切日: 12月11日(土)まで

オーストラリア原子核工学教室開催について

分 野: 放射性アイソトープ

期 間: 1972年6月26日～7月21日

場 所: オーストラリア, ニュー・サウス・ウェールズ, ルーカクハイツ

締切日: 1972年5月22日

編 集 和 田 允 昭
理・1号館 217号室 内線 2298